

『月と六ペンス』に描かれる女性の抑圧

—フェミニズム批評の視点から—

200111 齋藤 朱里

序章

イギリスの作家ウィリアム・サマセット・モーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) の『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*, 1919) は、平凡な男性が全てを捨て、芸術に傾倒した情熱の生涯を描いたベストセラー作品である。証券マンであった主人公ストリックランドは、40歳を過ぎてから、突然内なる呼びかけに応じ絵画に没頭するようになる。家族を含む全てを投げ出し、南太平洋のタヒチに移り住んだ彼は、先住民との暮らしの中で創造的なインスピレーションを得て、驚くべき傑作を完成させる。この作品は、モームとしては初めての一人称小説であるという特徴があり、これ以降『お菓子とビール』(1930) や『かみそりの刃』(1944) といった長編小説でもこの形式が用いられている。

この作品について、先行研究としては、大きく3つの観点からの研究が主流である。1つ目は、英米文学者の大野 (1996) のように、主人公ストリックランドの人物像に着目し、それを明らかにすることを目的とした研究である。英文学者でモーム研究者の行方 (2010) も指摘しているように、モームは謎なるものとして人間を描き続けているという特徴がある。これによって登場人物の人物像に着目した研究が多くなっていることが予想される。2つ目は、英文学者の久木元 (2016) のように、語り手など作品の構造に着目した研究である。3つ目は、ヨーロッパ文学研究者の田中 (2004) に見られるように、モームが描こうとしたテーマの考察や、モームの価値観と作品の関係の考察など、作者に着目した研究である。

一方で、作品に登場する女性キャラクターに着目した研究は、女性キャラクターに着目しない研究と比較すると遥かに少ない。この作品には、主人公ストリックランドの妻で、突然夫を失うストリックランド夫人や、ストリックランドと恋人関係になるがストリックランドに捨てられて自殺してしまうブランチ、タヒチの原住民でストリックランドと結婚するアタなど女性キャラクターが複数登場するが、彼女たちはあまり着目されていないのである。モームの女性描写の意図を分析した英語学者の Wang & Pancheng (2021) や、女性の描かれ方を分析し、女性は作中において牢獄に身を置くことになると指摘した英米文学研究者の Gaździńska (2002) などの研究は見られるものの、フェミニズム批評の観点からこの作品が十分に検討されているとは言い難いだろう。そのため、『月と六ペンス』を今まで十分にはされてこなかったフェミニズム批評の視座から批評することには価値があり、本論文の主題とする。

また、フェミニズム批評の観点からの過去の研究では、女性キャラクターの描かれ方の分析のみを研究の対象としていた。それを踏まえ、本論文が目的とするのは、男性キャラクターと女性キャラクターそれぞれの描かれ方を分析した上で比較し、この作品がジェンダー

に関するどのような価値観を肯定あるいは否定しているかを検討することである。作品が描かれた 20 世紀初頭とはジェンダー観が異なる現代の視点からテキストを詳細に分析することで、過去には問題視されなかったジェンダーに関する問題が果たしてテキストに隠されているかどうかを明らかにしたい。

本論文では、作中に現れるジェンダー不平等の問題を明らかにするためにフェミニズム批評の手法を用いてテキストの分析を行う。先述した本論文の目的を明らかにすることで、従来の読みを再検討し、見過ごされてきた問題に焦点を当て、新たな解釈の可能性を探っていく。なお、本論文では『月と六ペンス』の金原瑞人訳と土屋政雄訳の 2 つの訳本を用いる。なぜなら、訳者の表現によってテキストから受ける印象が異なるため、複数の訳を参照することは重要であると思われるためである。

本論文の構成として、まず第 1 章では、先行研究をフェミニズム批評に基づくものとそれ以外とに分類して整理することで、これまで作品に対して主流となってきた読み方や、ジェンダーの観点ですでに指摘されていることを明らかにする。また、本論文で用いるフェミニズム批評の定義についても確認する。

第 2 章では、作品の舞台となる 19 世紀におけるイギリスのジェンダー観についてまとめ、作品の前提として存在していた価値観を確認する。その上で、テキストに基づいて男性キャラクターの描かれ方を分析し、この作品において男性がどのように扱われているか、そして作品がどのようなジェンダー観に基づいて描かれているかについて論じる。

第 3 章では、女性キャラクターの描かれ方を分析し、どのようなジェンダー観に基づいて彼女たちが描かれているかについて論じる。そして、第 2 章での分析を踏まえ、男性キャラクターと女性キャラクターの描かれ方を比較し、フェミニズム批評の視点からこの作品を解釈すると、どのような問題が明らかになるかということについて検討する。また、女性に対するモームの価値観を参照し、この作品における女性描写と関係があるかどうかを明らかにしたい。

第1章 先行研究における批評

『月と六ペンス』は、さまざまな視点から批評されてきた。本章ではまず、本論文における分析の前提として、今まで多くなされてきた、フェミニズム批評以外の視点からの先行研究を整理し、この作品において主流となっている解釈を確認する。次に、フェミニズム批評の視点からの先行研究を整理し、すでに指摘されていることを明らかにする。そして、本論文で用いるフェミニズム批評について、その内容を確認する。

第1節『月と六ペンス』に対する従来の批評

本節では、フェミニズム批評の視点以外から論じられた先行研究を確認する。これらの研究は、考察の対象によって大きく3つに分類できる。1つ目は、主人公ストリックランドの人物像に着目し、それを明らかにすることを目的とした研究である。2つ目は、語り手など作品の構造に着目した研究である。3つ目は、モームが描こうとしたテーマの考察や、モームの価値観が作品にどのように現れているかの考察など、作者に着目した研究である。

1つ目の、主人公ストリックランドの人物像に関する研究の例として、大野(1996)が挙げられる。ストリックランドは、人に対して冷酷な天才画家という特徴的な人物であり、彼の人物像の詳細な分析を行う研究や、彼の描写の意図を探る研究が多く見られる。この研究者は、語り手「わたし」によるストリックランドの表現の分析によって、彼の人物像を明らかにした。この研究者は、モームがストリックランドを冷酷無慈悲な人物として描いている原因について、芸術への専念と平穏な家庭生活が両立しないことをモームが確信しており、ストリックランドを芸術に憑かれた人物として徹底的に描き切っていることに起因すると指摘している。また、ストリックランドは芸術家として価値体系を自ら作り上げなければならぬため、他人の幸福や不幸から超然としているのはもちろんのこと、他人に傾こうとする自己をも抑えていると彼女は分析している。

2つ目の、語り手など作品の構造に着目した研究の例として、久木元(2016)が挙げられる。久木元(2016)は、語り手「わたし」が作品に与える効果について分析し、「わたし」という第三者の人物によって物語が淡々と語られている点が、この作品の特質だと指摘する。また、「わたし」は、さほど洞察力に優れた人物ではなく、普通の作家に過ぎないという印象を冒頭から読者に刷り込ませていることに加え、語られる登場人物の人間性はあくまでも「わたし」の目を通してのものである。このことから、何が真実で何が語り手によるフィクションであるか読者はわからないという、語り手に対する信頼の置けなさの問題が作品に存在することをこの研究者は指摘している。彼が指摘した語り手の信頼の置けなさについては、英米文学研究者の Nakai(2003)や英文学研究者の脇田(1982)も指摘している。

3つ目の、モームが描こうとしたテーマの考察や、モームの価値観が作品にどのように現れているかの考察など、作者に着目した研究の例としては、田中(2004)と英文学者の井出(1988)が挙げられる。田中(2004)は長年モームの友人であった Karl G. Pfeiffer のモー

ムに関する言及を参照し、モームという人間と作品との関係を考察した。この研究者は、モームの物語には彼の人生観が染み込んでいると指摘する。モームが若い時から人生の意味について研究していたことが、世間体を気にせず自身に望む幸せを追求するストリックランドを描き出すことにつながったという。またこの研究者は、モームにタヒチを旅した経験があることが、作中のタヒチの描写に反映されたことも指摘している。また、モームは若い頃伯父の家に住んでいたが、伯父を尊敬できないと感じて家を出るなど、常に一種の反逆心を持っている人物だったと Pfeiffer は言う。そのような反逆心が作品に表れているということもこの研究者は指摘している。また、井出 (1988) によれば、人間は矛盾を孕んだ存在であるとモームが考えていたことが、作品の登場人物の中に二面性が描かれることに影響したという。加えて、モームは 19 世紀末の芸術至上主義の影響下に育っており、この世に芸術よりも大切なものはないと悟っていたことで、ストリックランドという芸術に傾倒する人物が描かれたことも指摘している。

本節では、フェミニズム批評の視点以外から論じられた先行研究を、考察の対象から 3 つに分類して整理した。『月と六ペンス』に対する研究として、主人公ストリックランドに着目したものや語り手など作品の構造に着目したもの、作者モームと作品の関係に着目したものが主流であることを確認した。

第 2 節 先行研究における、ジェンダーの視点からの批評

前節では、フェミニズム批評の視点以外から論じられた先行研究を 3 つに分類して整理した。これにより、この作品への主流となっている解釈を確認したが、本節では、フェミニズム批評の視点からの先行研究を整理し、ジェンダーの観点から既に指摘されていることを明らかにする。また、先行研究に対する批判的検討を行い、本作品における新たな研究の可能性を検討したい。

フェミニズム批評の視点からの先行研究は 4 つ挙げられる。まず、Gaździńska (2002) はモームの作品における女性の描かれ方を分析している。そして、モームが描く女性は、プロット、ナレーションのレベルから、ステレオタイプといった潜在意識の層まで様々な「牢獄」に身を置くことになると指摘している。つまり、「女性はこうあるべき」といった価値観に基づいて、まるで牢獄に入れられているかのように言動が抑圧されているのである。具体的には、モームの作品において、女性は男性が享受している基本的な自立を否定され、自分の意見を言う自由も与えられず、一人の人間として描かれることはほとんどないという。女性たちは常に男性キャラクターとの関係で描かれ、「無垢な乙女」、「邪悪な誘惑者」などという、物語で初めに貼られたレッテル通りの役割を演じることを強いられると彼女は論じている。自分の意見を言う自由が与えられていないという主張の根拠として、アタという女性キャラクターは、ストリックランドへの限りない愛が語り手によって後から語られるだけで、直接的には彼女が描かれないことをこの批評家は指摘している。女性はステレオタイプに基づいた息苦しい「枠」にはめられ、小説の中で行動する主体ではなく、語られる対象と

して幽閉されてしまうのである。

Gaździńska (2002)の解釈について、女性キャラクターがステレオタイプによって言動を抑圧されていることについては賛同するが、自分の意見を言う自由が与えられていないということについては、その限りではないと考えられる。なぜなら、主人公ストリックランドの妻であるストリックランド夫人は、突然家を出たストリックランドのことを許さないという発言をしていることに加え、ストリックランドの友人ストループの妻であるブランチは、病気のストリックランドを自分の家で看病するのは嫌だという発言をしているなど、女性キャラクターも自分の意見を主張する場面は多く見られるためである。また、この研究者はモームの作品を6作品取り上げ、各作品の女性像を分析している。そのため、『月と六ペンス』に登場する女性キャラクターに対する分析や、筆者の意見の根拠として指摘されていることが量的に少ない。このことから、本論文においてさらに詳細な分析をすることや、この研究者が指摘していない箇所を根拠として取り上げる余地があると考えられる。

2つ目として、Wang&Pancheng (2021)は、女性キャラクターの描かれ方を分析、解釈している。彼らによると、作品に登場する3人の女性はストリックランドのために犠牲になったという。ストリックランド夫人は家族を失い、ブランチは彼のために命を落とし、アタも彼のために自分の全てを捧げた。このような描写を根拠として、男性優位社会の影響による、奴隷のように男性に仕える女性像をモームは描いているとこの研究者らは指摘している。この解釈に対して筆者は賛同し、男性優位社会における男性にとっての理想を叶える、奴隷のような女性像が本作品では描かれていると解釈する。

また、Wang&Pancheng (2021)は、ストリックランド夫人は献身的で優しい妻であり母だが、二面性を持つ人物でもあることも論じている。その根拠として、夫が家を出た理由が不倫ではなく芸術のためだと知ると彼を憎み、世間から「かわいそうな妻」という印象を持ってもらうために、周囲には「夫が誰かと駆け落ちして自分は捨てられた」という嘘をついたことを指摘している。彼女は、世間を味方につけるためには嘘をつくことも辞さない人物なのである。このことから、家父長制の社会では、女性は「女らしい」役割を期待されること、そしてストリックランド夫人は本当の自分を見せることができず、偽りの自分しか見せられないということを彼らは指摘している。また、ブランチがストリックランドに捨てられ、自暴自棄になり自ら命を絶つという描写について、恋愛に溺れ、視野が狭いという女性への偏見的な描写であるとの研究者らは論じている。そして、アタについては、ストリックランドの妻というより召使のような都合の良い存在として描かれ、ぞんざいに扱われても主人を尊敬し愛情を注ぐ描写がある。このことから、女性の社会的地位の低さが反映された人物像であり、また男性にとって都合の良い女性が理想的な女性として描かれていることから、男性中心的な価値観に基づいた人物像でもあるとの研究者らは指摘している。

3人に対する上記の解釈は妥当だと思われる。しかし、この研究者らは作中の女性キャラクターがどのように描写されているかについて、テキストを直接引用しながら意見を主張している訳ではないため、意見や解釈が恣意的である可能性があると考えられる。例として、

ストリックランド夫人は愛らしいイメージを維持するために努力しなければならないと彼らは指摘しているが、この解釈の根拠が示されておらず、信頼に欠けるといえよう。そのため、本論文においてはテキストを直接引用することで、客観的にさらに信頼度の高い分析をすることが可能であると考えられる。

3つ目として、英文学者の Muraoka(1991)は女性キャラクターと著者モームとの関係性について論じている。彼女によれば、モームは彼自身が幼い頃に亡くした母を神格化しており、モームの女性観をストリックランドを通じて伝えているように思われるという。例として、ストリックランドがモームの母のように純粋で暖かな性格のアタを最も好む様子を取り上げている。またブランチがストリックランドにとって単なる欲望の対象だったわけではない可能性を指摘している。根拠として、絵画は画家と被写体の協力の賜物であるが、ストリックランドが描いたブランチのヌードが魂を感じるような作品であったことを挙げ、2人の間には特別な何かがあったため素晴らしい絵画となったのではないかと指摘している。

Muraoka(1991)の解釈について、モームにとって理想の女性像が作品の女性像に反映されているという解釈は妥当であると思われる。一方で、ブランチがストリックランドにとって単なる欲望の対象だったわけではないという指摘は妥当でないと思われる。なぜなら、ブランチのヌード画についてストリックランドは「ほんとうに満足できる絵じゃなかった」（金原訳, p. 247）と話しており、この研究者が解釈の根拠としている作品の素晴らしさはストループの意見にすぎず、ストリックランドにとっては傑作ではなかったことがわかるためである。これに加え、ストリックランドの「(ブランチは) ほれほれするほどいい体をしていて。それでヌードを描きたくなかったんだ。絵ができると興味は失せた」（金原訳, p. 247）や「(ブランチは) どうでもいい女」（金原訳, p. 250）という発言から、ストリックランドにとってブランチは特別な相手ではなく、単なる身体的魅力からヌード画を描いたことがわかる。したがって、2人の間には特別な何かがあったため素晴らしい絵画となったのではないかという指摘は妥当ではないと言えるだろう。

4つ目として、英文学者の Han& Malini (2023)はストリックランド夫人について分析している。この研究者らは、家父長制における保守的な思想がストリックランド夫人の内面に影響を与え、彼女の複雑な性格が作られたことを指摘している。ストリックランド夫人はビジネスを成功させるなど自立心も垣間見える人物だが、女性は経済的に他人に依存すべきという保守的な価値観に基づいてビジネスを辞めてしまう。これを根拠として、この研究者らはストリックランド夫人が社会の価値観に影響され、無意識のうちに女性の機会を制限することの擁護者になってしまっていることを指摘している。この研究の解釈に筆者も同意し、ストリックランド夫人は彼女が本来持っていた自立心と、女性の地位が低い家父長制社会に影響されて作られた価値観との間での苦悩があった人物だと解釈したい。

本節ではまず、フェミニズム批評の視点からの先行研究を整理し、女性であることで女性キャラクターの言動が抑圧されていることや、男性中心的な価値観に基づいて彼女たちが描かれていることが既に指摘されていることを明らかにした。また、先行研究に対する批判

的検討を行い、この作品についてフェミニズム批評の視点からより詳細な分析をする余地があると考えられることを論じた。

第3節 フェミニズム批評

前節では、フェミニズム批評の視点からの先行研究を整理し、ジェンダーの観点ですでに指摘されていることを明らかにした。そして、先行研究に対する批判的検討を行い、この作品にはフェミニズム批評の視点からの研究の余地があることを指摘した。本節では、次章より行うテキスト分析の前提として、本論文で用いるフェミニズム批評の定義を説明する。

フェミニズム批評は、女性解放運動を基礎として1970年代に始まった。英文学者の小林(1987)によれば、フェミニズム批評とは、それまでの男性中心の文学作品や批評における男女不平等を明らかにした上で、文学作品内の女性像に関して女性の視点から改めて検討し、かつ文学批評における望ましい基準を模索しようとする営みをも含むものである。また、英文学者の織田(1988)は、フェミニズム批評は、文化の批評、特に「家父長制文化」の批判に繋がっていくと論じている。一般に、フェミニズム批評の出発点はフェミニスト作家であるケイト・ミレットの『性の政治学』(1973)に見出されている。フランス文学研究者の高岡(2007)によれば、ミレットが行ったのは、アメリカにおける第二派フェミニズム運動を文学批評に取り込み、男性作家が書いた文学作品に存在する男性中心主義や女性蔑視を痛烈に炙り出し、糾弾することであったという。つまり、ミレットは文学作品が男性の価値観に基づいて書かれ、テキスト内で男性が女性を支配していることを明らかにするきっかけを作ったのである。このように、フェミニズム批評はテキストを女性の視点から批評することで、テキスト内に存在する男女不平等を明らかにしようとする営みであることがわかる。

フェミニズム批評は様々なアプローチを組み込んでおり、その理論的枠組みを複雑にしている。ヴィクトリア朝女性研究の第一人者である Elaine Showalter(1981)によると、フェミニズム批評は3つの段階を経て展開してきた。まず1970年代には、文学作品の女性キャラクターが男性主義的な文化によって貶められていることを明らかにすることに焦点を当てていた。2つ目の段階は1970年代半ばから1980年代半ばまで続き、主に女性作家による文学作品を分析することに焦点が置かれた。1980年代半ば以降に始まった第三段階は、ポスト構造主義やポストコロニアルといった文学理論を反映し、多様なフェミニズム文学理論の枠組みを形成することを含んでいた。このように、フェミニズム批評はそのアプローチの多様性を広げながら展開してきた。

文学作品の女性キャラクターに焦点を当てたフェミニズム批評の方法については、日本古典文学研究者の櫻井(2013)によると、文芸批評家のジョナサン・カラー(2009)がその要点を3点にまとめている。第一に、フェミニズム批評は女性という立場からテキストを読み、個々の作家、ジャンル、時代の生んだ諸作品が示す女のイメージを踏まえつつ、女性の登場人物の置かれた状況や心理に関心を向けることで、女性の捉えられ方や女性のイ

メージについて批判するものである。ここで言う「女性という立場から読む」とは、女性・男性の読者が、男性中心主義的に読解されてきたテキストに対し、そのイデオロギーに与しない立場から向き合うということを意味する。第二に、女性としてテキストを読み直すことによって、自らの読みを支えてきた文学的・政治的な前提を問い直し、男性の読みに潜む歪曲や自己弁護を具体的に指摘し、是正策を示す狙いがある。これはテキストに関する先行研究に潜在するジェンダーバイアスを発見し、その男性中心主義的思想を指摘し、テキストの解釈更新をはかるために有効であるとカラーは指摘する。第三は批評の基準を模索する営みであり、男性の権威が生み出した諸概念が、より広いテキストの体系のなかに中立的に再定位されるような批判の様式を追求する。本論文では上記の解釈に基づき、『月と六ペンス』について、女性の登場人物の置かれた状況や心理に関心に向け、男性中心主義的に読解されてきたテキストに対し、そのイデオロギーに与しない立場から批評する。

本章では、まず、『月と六ペンス』についてのフェミニズム批評以外の視点からの先行研究を整理し、作品に対する主流な解釈を確認した。そして、フェミニズム批評の視点からの先行研究を確認し、より詳細な分析を通じた解釈の余地があることを論じた。そして、本論文で用いるフェミニズム批評について、その定義を確認した。次章では、本節で確認したフェミニズム批評の認識に基づき、『月と六ペンス』における登場人物の描かれ方を分析する。

第2章 男性キャラクターの描かれ方

前章では、『月と六ペンス』に関する先行研究について、フェミニズム批評の視点からのものとそれ以外とに分けて整理し、前者の研究が少ないことを示した。また、フェミニズム批評の定義についても確認した。本章では、前章で確認した先行研究を踏まえ、『月と六ペンス』における男性キャラクターがどのように描かれているかということ、特にジェンダーの観点から分析する。そして、この作品に登場する男性がどのようなジェンダー観に基づいて描かれているかについて論じたい。はじめに、作品分析の前提として、作品の舞台である19世紀にはどのようなジェンダー観がイギリス社会に存在していたかを確認する。次に、主人公ストリックランドの描かれ方を分析する。最後に、ストループの描かれ方を分析し、この作品における男性に対するジェンダー観がどのようなものであるかについて論じる。

第1節 19世紀イギリスのジェンダー観

前節で確認したように、フェミニズム批評は、文学を生み出した背景である社会・文化の批評にも繋がる営みである。従って、作品が書かれた背景にどのような文化が存在していたかを理解しておくことは重要である。そのため本節では、『月と六ペンス』の舞台である19世紀のイギリス社会におけるジェンダー観について確認する。作中の登場人物は中産階級であることから、特に中産階級に着目し、ジェンダー観に関わるものとしてフェミニズム運動についても着目する。

19世紀イギリスの中産階級には、家父長制が浸透していた。そして、家父長制的性格は特にヴィクトリア朝(1873-1901)において顕著なものとなった。この原因は、18世紀後半からの産業革命による経済機構の変革と、それに続いたヴィクトリア朝の経済成長であると一般に言われている。イギリス文学研究者の吉田(2003)によると、産業革命によって封建制度が崩壊し、産業を担うブルジョワジーが台頭したことで、経済力を持った中流上層階級の人々が貴族に代わって社会の中核を担うようになったという。そして、工業化によって夫は家から離れた場所で働くようになる一方、妻は家に残って家庭の仕事に従事するようになった。これにより、妻は仕事で疲れた夫に安らぎを与え、子供を育てることに専念して、家庭を守るというのが社会の慣習になったという。このように、男女の社会的領域が分断され、男性は公的領域、女性は私的領域に関わるものであるというイデオロギーが中産階級において支配的になったことをイギリス文学研究者の青木(2003)は指摘している。また、ヨーロッパ文学研究者の富田(2010)によれば、仕事に邁進する男性を支えた女性たちの内助の功は国富に資する強力な底力と考えられ、家庭を賛美する風潮が強かったという。上記のような社会的背景の中で、女性は「家庭の天使」として家庭を守ることが美德とされるようになったのである。このように、19世紀イギリスは家父長制社会であり、また社会の変化によって男女の領分が分けられ、女性と家庭の結びつきが強固なものとなったことがわかる。

また、吉田(2003)によれば、19世紀の社会では、男性の方が精神的に、肉体的に、そ

して道徳的に女性より優れているとされ、それは明らかに自然法則の一つであると思われる。そのため、女性は男性に服従する存在であり、野望や独立心を持つことは女らしくない資質だと考えられていた。富田（2010）が指摘するように、ヴィクトリア朝においては男は逞しく強く、女はか弱く優しく美しく、という男女のステレオタイプが存在していたのである。また、妻が公の場で働くことは夫の体面を汚す品のないこととみなされており、女性は経済的に男性に依存することが理想とされた。つまり、女性は精神的にも経済的にも男性に依存しなければならなかったのである。そして女性は妻・母・娘というように、男性との関係で規定される相対的な存在であり、一人の人間としての存在感は極めて希薄だったことを富田（2010）は指摘している。このように、19世紀イギリスでは女性の立場は男性と比較して非常に低いものであり、女性は男性に依存する存在であったことがわかる。

また、産業革命によって経済力を持った中産階級の生活様式は変化していった。青木（2003）によれば、中産階級は上流階級のモードを志向するとともに、独自の生活様式の基盤を家庭に求めたという。彼らは、社会的評価を得るために、繁栄のシンボルとしてさまざまな装置を導入した。それは例えば、広大な屋敷、煌びやかに飾った部屋、多くの家事使用人、乳母および子女の教育に携わるガヴァネスなどの人的配置、パブリックスクールからオックスブリッジへの息子の教育、友人・知人を招待しての豪華なパーティーなどである。このように、中産階級の人々は世間からの評価を気にして、部屋の装飾や子供への教育を重要視するようになったのである。

前述したような女性の地位が低い社会への抵抗として、フェミニズム運動はどのように展開してきたのだろうか。フェミニズム思想は、一般にメアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』（1792）に始まるとされる。しかし、吉田（2003）によれば、当時この本はほとんど注目されず、本格的な女性の反乱は19世紀になってから起こったという。政治学者の大嶽（2017）によれば、女性運動の成果として、1857年の離婚法改正、1882年の既婚婦人財産法制定、1873年に妻が子供を引き取る権利を与える法律が制定されたことなどが挙げられる。19世紀における中産階級の女性にとって、結婚は生きていくための唯一の手段であったが、結婚生活において女性は財産権や親権も持たない無権利状態だった。このような状態に対する反抗としての女性運動の結果、女性の権利が獲得されていったのである。しかし、前述した女性運動の成果はいずれも国政における女性参政権の獲得前であり、大嶽（2017）によれば、女性運動は第一級国民としての地位を求める運動となっていった。そして、女性参政権が完全な形で成立したのは1928年であることから、女性の地位が依然として低い状態が継続されたことがわかる。

本節では、19世紀におけるイギリス社会のジェンダー観を確認した。19世紀イギリス社会では、産業革命の影響により、男性と女性の領分が分けられるようになり、「男らしさ」や「女らしさ」というイデオロギーが形成されていった。また、精神的に、肉体的に、そして道徳的に男性は女性より優れているとされ、女性は常に守られるべきである弱い存在であった。女性の地位が低い状況に対する反抗として、本格的な女性の反乱は19世紀になっ

てから起こり、女性の財産や離婚などの権利が獲得されていったが、依然として女性の地位は低かったことを確認した。これを踏まえ、次節からは『月と六ペンス』の登場人物について分析していく。

第2節 ストリックランドの描かれ方の分析

本節では、『月と六ペンス』の主人公であるストリックランドがどのような人物として描かれているかを分析する。そして、この作品に存在している男性へのジェンダー観について論じる。

まず、ストリックランドに対する分析の前提として、語り手がどのような立場から物語を語っているかについて分析する。読者は語り手の言葉によってのみ物語や登場人物について理解することができるため、物語の解釈の前提として語り手のあり方を確認しておくことは重要となる。『月と六ペンス』は、ストリックランドと知り合いで、作家である「わたし」という人物によって、第三者目線から語られている。語り手「わたし」は、なぜこの物語を書いたのだろうか。

チャールズ・ストリックランドに関する文献がこれほどたくさんあれば、わたしが新たに何かを書き足す必要はないように思える。(中略) わたしは、おおかたの人間よりストリックランドと親しかった。(中略) だが、戦争を逃れてタヒチに赴くという偶然がなければ、彼のことを書き記すこともなかつたろう。この島でわたしは彼のことをよく知る人びとと出会った。そして気づけば、多くが闇に包まれていた彼の晩年に、光を当てる役割を担っていた。(金原訳, pp. 13-14)

上記の言葉から、語り手はストリックランドの晩年を書き記すことを目的として物語を書いていることがわかる。また、語り手は「わたしはあくまでも自分の楽しみのために物語を書く」(金原訳, p. 17) と述べている。したがって、語り手はストリックランドに関する正確な描写を人々に伝えることを第一優先にはしておらず、自分の楽しみのために物語を脚色する可能性もあるといえよう。そして、ストリックランドが語った内容について、語り手は、「話し下手のせいで、それまでの経験をいくら語ってくれても、断片しか伝わってこない。断片と断片のすきまは、想像力で埋めるしかなかった」(金原訳, p.127) と述べている。この言葉から、語り手が想像力で埋めたことが事実でない可能性もあると解釈することができる。また、語り手の信頼の置けなさについて、語り手自身も以下のように言及している。

ストリックランド一家について書いた文章を読み返してみると、我ながら嘘っぽく思えてしょうがない。(中略) のちに起こった全てを思い返してみると、自分は鈍感だったのだろうかと考えずにはいられない。チャールズ・ストリックランドの尋常では

ない部分に、少しは気づけなかったものだろうか。たぶん、鈍感だったのだろう。

(金原訳, pp. 38-39)

このように、語り手に人を見る目がない可能性があることを語り手自身が自白している。そのため、我々は上記のような語り手の信頼の置きなさに留意しつつ、物語を読むべきだろう。

次に、ストリックランドの描写を見ていく。前述したように、彼は画家になるために突然家を出て、家族を捨てた人物である。そして、この突然家を出るという出来事の前で、彼の人物像の描かれ方が大きく異なっている。まず家を出る前は、彼は退屈で平凡な男性として描かれている。ストリックランド夫人の、「(夫は)証券取引所の仲介人よ。それもよくいるタイプの。会っても、死ぬほど退屈すると思うわ」(金原訳, p. 31)という言葉や、「あの人は自分が凡人だと認めているの。仲介人としてもそう優秀ではないし」(金原訳, p. 31)という言葉から自他共に認める凡人であることがわかる。また、語り手も「ストリックランドは、際立った部分がなにもない、善良で退屈で正直な、絵に描いたような凡人だった。悪い人間ではないが、友人になりたいとは思えない。つまり、どうでもいい存在なのだ」(金原訳, pp. 35-36)と述べており、ストリックランドは取るに足らない平凡な人物として描かれていることが理解できる。

一方、家を出た後のストリックランドは自分勝手に冷酷な人物として描かれている。彼が家を出た後、語り手はストリックランド夫人に頼まれ、ストリックランドに会いに行く。そして、語り手がストリックランドに対して、妻が突然捨てられて不幸であることは心によぎらなかったのかを尋ねると、「不幸など、いずれ乗り越えるさ」(土屋訳, p. 79)とストリックランドは答えている。また、語り手とストリックランドの、「奥様はどう暮らしていけばいいんです」「17年もくわしてやったんだ。そろそろ自力でやってみてもいいと思わんか」(土屋訳, p. 81)という会話や、「お子さんのことを考えないんですか。(中略)あなたに見捨てられたら、路頭に迷うんですよ」「もう何年もいい暮らしをしてきたんだ。それだけで、世のほとんどの子供より恵まれてるさ。(中略)小さいころはかわいいとも思った。だが、どんどんでかくなって、もう特別な感情はないな」(土屋訳, p. 82)という会話などからも、ストリックランドが家族のことを全く気につけない冷酷な人物であることがわかる。

また、ストリックランドは女性を見下した価値観を持つ人物でもある。「女ってのは精神が貧困だ。愛、何かというと、愛だ。男が去る理由は心変わりしかない、と決めつける」(金原訳, p. 76)や、「女というのは馬鹿だから困る」(土屋訳, p. 102)といった言葉から女性を見下していることが伺える。また、愛は芸術への没頭を邪魔するものであり、女性は欲望の対象に過ぎないと彼は捉えていることが以下のストリックランドの言葉からわかる。

愛などいらん。(中略)俺はすべての欲望から解放される日が待ち遠しい。そうすれば何にも邪魔されず絵に没頭できる。女は恋愛くらいしかできないから、ばかばかしいほど愛を大事にする。愛こそ人生だと、女は男に信じ込ませようとする。(中略)女は欲望のはけ口に過ぎん。夫になれだの、相手になれだの、連れ合いになれなど、女の要求には我慢ならん。(金原訳, pp. 247-48)

上記引用中の、欲望から解放されれば何にも邪魔されず絵に没頭できるという言葉から、彼は、愛や欲望は芸術家になる上で邪魔なものであると考えていることが伺える。また、「女は欲望のはけ口に過ぎん」と述べていることから、女性は単なる欲望のはけ口であり、パートナーとして尊重する存在ではないという価値観の持ち主であることがわかる。以上のことから、ストリックランドは平凡な人物だと思われていたが、実は非常に冷酷で女性蔑視の価値観を持つ人物として描かれていることが理解できる。

ストリックランドの描かれ方から、この作品における男性へのジェンダー観はどのように解釈できるだろうか。まず、「ストリックランド一家は、ブルジョワ階級の平均的な家庭だった。(中略)父親は退屈だが、慈悲深い神によって与えられた地位で義務を果たしている」(金原訳, p. 39)という描写がある。前節で確認したように、家父長制社会における中産階級の家庭では、男女の領分が分断され、男性は仕事に専念して家族を養うことが期待されていた。このことを踏まえると、上記引用中の「義務」という言葉は「稼いで家族を養うこと」を指していると推測でき、ストリックランドが中産階級の男性のステレオタイプ的なイメージとして描かれていることがわかる。また、「(ストリックランドは)今の環境に十分適応するだけの知性があり、だからこそ世間並みの成功があり、幸せがある」(土屋訳, p. 43)という語り手の言葉から、男性が家族を養うためには知性が必要であると考えられていることがわかる。従って、家父長制社会におけるジェンダー観と同様に、男性は知性を持ち、家族を養うべきだというジェンダー観がこの作品にあることが読み取れるだろう。また、「子供の頃は画家になりたいと思っていた。だが、父親は普通の仕事に就かせたかった。芸術じゃ食っていけないと言ってな」(金原訳, p. 77)というストリックランドの言葉から、男性は芸術家といった不安定な職業に就くことがあまり歓迎されず、金銭を稼ぐことを期待されるということが読み取れる。

本節では、まず語り手の語りのスタンスを確認し、信頼の置けなさがあることを示した。また、ストリックランドの描かれ方を分析し、彼が非常に冷酷で女性を馬鹿にした価値観を持つ人物として描かれていると解釈した。そして、この作品のジェンダー観として、男性は知性を持ち、金銭を稼いで家族を養うべきだという価値観が存在していることを指摘した。

第3節 ストループの描かれ方

前節ではストリックランドがどのように描かれているかを分析した。では、他の男性キャ

ラクターはどのように描かれているのだろうか。本節ではストループという男性キャラクターを取り上げ、彼の描かれ方をジェンダーの観点から分析する。そして、この作品に存在している男性へのジェンダー観について考察する。

ダーク・ストループは、ストリックランドが家を出てパリに行った際に出会った三流の画家である。彼自身は天才画家ではなかったが、絵を見る目は非常に肥えており、ストリックランドの才能を初期から見初め尊敬していた。ブランチという女性と結婚しており、彼女を溺愛している。ストループの描かれ方の特徴について、6点指摘したい。

1点目として、彼は非常に良心的で寛大な人物として描かれている。語り手がパリに越えてきてアパートを借りたことをストループに伝えた際には、知らせてくれれば良いアパートを見つけて家具も貸してやれたし引っ越しも手伝ったのと言っていることから、優しい人物であることがわかる。語り手も彼について、「ディルク・ストルーヴェほど裏表のない、誠実で率直な人間はいない」（金原訳, p. 115）と述べている。このように、彼は並外れた優しさを持つ人物として描かれている。

2点目として、彼は滑稽さも持ち合わせており、人にかからかわれやすい人物として描かれている。彼がストリックランドからからかわれ、傷つけられた場面を見てみよう。

ストルーヴェがやってきてわたしたちのテーブルに座ると、（ストリックランドは）すごい勢いでからかいはじめた。（中略）いわれのない奇襲に不意を突かれ、ストルーヴェは防御さえできずにいた。怯えて必死に逃げ回る羊さながら、あわてふためき目を白黒させ、ついには涙をこぼした。ところが始末の悪いことに、どんなにストリックランドを嫌悪し、こんな一方的な攻撃は許しがたいと思っている者でも、こみ上げてくる笑いは抑えようがなかつただろう。ディルク・ストルーヴェは、真摯な気持ちさえ愚かしくみえてしまう、例の不幸な人種に属していたのだ。（金原訳, p. 144）

上記引用場面から、ストループがからかわれやすく、滑稽に見えて人から笑われやすい人物であることがわかる。また、妻ブランチがストリックランドに恋をして家を出て行った後に、帰ってきてくれるようにストループが路上ですごったことについて語り手は、「私は猛烈に腹が立った。この男には誇りも分別もないのか。まるで軽蔑されそうなことばかり選んで言っているのではないか……」（土屋訳, p. 211）と述べており、ストループが滑稽であることに対して語り手は怒りまで湧いていることがわかる。また、妻が出ていったことに動揺するストループに対して語り手はいらだち、「男のヒステリーなどみっともないぞ」（土屋訳, p. 189）と言っていることから、男性はヒステリーを起こさず落ち着いたべきだというジェンダー観がこの作品に存在していることが窺える。

3点目として、彼は妻を心から愛する人物として描かれている。語り手の「ダークからブランチへの愛は、素朴で、ひたむきで、美しかった。夫自身はいつも道化でありつづけたが、妻への誠実な愛情には誰もが好感を持った」（土屋訳, p. 159）という言葉から、周

困から見ても好感を持つほどブランチを愛していたことがわかる。また、ブランチが家を出ていこうとする場面では、「ぼくは君を大切にし、敬ってきた。世界中のどんな夫にも負けないほどに」（土屋訳, p. 194）と言っていることから、ストループが深く妻を愛していたことがわかる。また言葉だけでなく、ストリックランドの家で暮らそうとするブランチに対して「君がああ汚い屋根裏部屋で暮らすなんて、考えるだけで堪えられない」（土屋訳, p. 197）と言いストループ自身が家を出ていくことに加え、自殺を図ったブランチのために病院の個室を手配していることから、妻のことを深く愛していることが窺える。

4点目として、3点目で示したようにストループは妻を愛している一方で、ブランチに優しい妻としての役割を押し付けているとも捉えられることを指摘したい。病気のストリックランドを家に連れてきて看病することについて妻ブランチは嫌がるが、それに対してストループは「ああ、ぼくの愛するブランチ、君はちょっとした面倒をいやがるような人じゃないよね？」（土屋訳, p. 173）や、「いつもの君はどこへ行ったの。やさしくて親切な君は？」（土屋訳, p. 173）と言っている。妻が嫌がることについて妻の人柄の話を持ち出して説得していることから、常に自分の理想とする優しい妻でいさせようとしている側面があるとも言えるだろう。また、「どうしようもなく困っていたときに、手を差し伸べてもらったことはなかったかい？それがどれほどありがたいことか、きみにはわかるだろう。機会があれば、自分もだれかに同じ親切をしてあげたいとは思わないかい？」（金原訳, p. 161）とストループが妻に言うと、妻が青ざめ、ストリックランドの看病に急に同意するようになる場面がある。妻のあまりの豹変ぶりに語り手も驚くが、「どうしようもなく困っていたとき」が何を指すのかは、後にストリックランドの発言によって明らかになる。ストリックランドによれば、妻ブランチはかつて貴族の家で住み込みの家庭教師をしており、その家の息子に言い寄られた。結婚してくれると思いきや、その家の息子の子供を孕んだまま屋敷から放り出されてしまう。そして自殺を図ったところにストループが通りかかり妻にしたという。つまり、ストループはブランチを助けた過去があったのだった。ストループとブランチの結婚にはこのような経緯があったことを踏まえると、上記の「自分もだれかに同じ親切をしてあげたいとは思わないかい？」という発言は、ストループが過去に妻を助けた恩があることを仄めかして妻が自分の思い通りになるようにしているとも解釈できるだろう。また妻の「出会ってからいままで、わたしが自分のためになにかを頼んだことは一度もなかったわよね」（金原訳, p. 160）という発言からは、ブランチが恩を感じて遠慮するような環境をストループが作っていた可能性があることが指摘できると思われる。従って、ストループは妻を非常に愛している人物として描かれているが、自分が妻を助けた恩を仄めかし、妻に理想的な妻でいさせる無言の圧力をかけている側面もあると解釈できるだろう。

5点目として、妻に母親のような役割を期待している人物として描かれていると解釈できることを指摘したい。ブランチが亡くなり傷ついたストループが母親のことを回顧し、

「身も心も傷つきたいま、ストループの心によみがえってきたのは母親の愛のやさしさだ。(中略) 母親は整理整頓に情熱を傾ける人だった。その台所はびかびかに磨かれ、清潔さの奇蹟だった」(土屋訳, p. 238-39)と述べている。また、ランチについて、「きれい好きは、ストループが最も好ましく思っていた妻の美点の一つだ。きれい好きの母のもとで育ち、整理整頓には無条件に惹かれた」(土屋訳, p. 244)と述べられており、ランチについて母と同じ綺麗好きな点を好んでいることから、妻に母親のような役割を期待しているとも言えるだろう。

6点目として、ストループは女性が自分の思い通りになると思っている側面がある。このことは、「子供のころ、隣家の馬具職人の娘と結婚すると宣言していたんだ。(中略) あの子なら、母に劣らず家をびかびかに磨いてくれたらろうし、ぼくの仕事を継ぐ息子も生んでくれたらろう」(土屋訳, p. 240)というストループの発言において、幼少期の知り合いの女の子と結婚した想定の話が大人になってからも真面目に話していることから読み取れるだろう。さらに、上記の「ぼくの仕事を継ぐ息子も産んでくれたらろう」という発言からは、妻の役割として子供を産むこと、ひいては仕事を継ぐことができる男の子を産むことを期待していることも指摘できると思われる。また、妻ランチに身籠った過去があることを前述したが、その後死産したことが語られている。そして、ランチとストループには子供がいないままである。このことを踏まえると、上記の「あの子なら息子も産んでくれたらろう」という発言は、息子を産まない妻ランチのことを言外に責めているようにも解釈できるだろう。このように、ストループは女性が自分の思い通りになると考えている側面がある人物として描かれていると解釈できる。

本節ではストループの描かれ方について6点指摘した。彼は非常に優しく妻を溺愛しているが、一方でランチに優しい妻としての役割を押し付けていることや妻に母と同じ役割を期待している人物でもあると解釈した。また、男性はヒステリーを起こさず落ち着いているべきだというジェンダー観がこの作品に存在していることについても論じた。

本章では、作品が描かれた19世紀イギリスのジェンダー観を確認した上で、ストリックランドとストループという男性キャラクターの描かれ方について分析した。その結果、この作品のジェンダー観として、男性には知性やお金を稼ぐことが期待されるといった価値観や、男性は常に落ち着いているべきだという価値観がこの作品に存在していることが理解できた。次章では、女性キャラクターについて分析する。

第3章 女性キャラクターの描かれ方

前章では、『月と六ペンス』において男性キャラクターがどのように描かれているか、ストリックランドとストループという2人を取り上げて分析した。前章で分析した男性キャラクターの描写と対比する内容として、本章では、ストリックランド夫人、ブランチ、アタという3人の女性キャラクターについて分析し、この作品において女性はどのようなジェンダー観に基づいて描かれているかを明らかにする。次に、男性キャラクターと女性キャラクターの描かれ方を比較し、この作品におけるジェンダー観及び、フェミニズム批評の視点から見た問題点について論じる。そして、モームの女性に対する価値観を参照し、作品の女性描写への影響があるか検討する。

第1節 ストリックランド夫人の描かれ方

本節では、ストリックランド夫人がどのように描かれているかを分析する。そして、彼女に対してジェンダーに基づく抑圧があるかどうかを検討する。

前述したように、ストリックランド夫人はストリックランドに突然捨てられるという不幸な出来事に見舞われる人物である。この作品では、彼女はどのように描かれているのだろうか。まず、彼女が良い主婦として描かれている場面を見てみよう。

ストリックランド夫人にはもう一つ好ましいところがあった。それは申し分ない主婦だったということだ。夫人のフラットはいつも整理整頓が行き届き、居心地が良かった。花が賑やかに飾られていて、客間の更紗カーテンも、模様は地味ながら色合いが明るくて美しかった。小さなダイニングルームの芸術的内装のことは、先に述べた通りだし、ここで取る食事も楽しかった。テーブルが上品にしつらえられていて、二人のメイドは身ぎれいでかわいい。出される料理も美味しいとくれば、ストリックランド夫人の主婦ぶりにけちなどつけられない。(土屋訳, p. 35)

上記引用場面のように、家の内装が芸術的で整っている点や整理整頓がいつも行き届いている点、料理が美味しい点について語り手が褒めていることが読み取れる。上記引用場面について、Han& Malini (2023)は、家事スキルが高いことが期待される家父長制社会における有能な女性としての描写であると指摘している。筆者もこの解釈に賛同し、ストリックランド夫人の描写には、家父長制社会における有能な主婦像が反映されていると解釈する。また、夫と子供たちのために家を快適な状態に保っていることから、家族に対する彼女の深い愛情も読み取れるだろう。そして、第2章第1節で確認したように、19世紀において中産階級の人々は部屋の装飾を重要視するようになった。これを踏まえると、上記引用での芸術的内装の描写は、19世紀における典型的な中産階級の家の様子が反映された描写であるといえよう。

また、彼女は男性がいなければ生きていけない女性として描かれている。このことは、彼

女の「私は夫なしでは生きていけません」（土屋訳, p. 69）という言葉や、彼女の兄の、「エイミーはこれからどうなる？子どもたちだってそうだ。どうやって食っていけというんだ？」（金原訳, p. 46）という言葉から伺える。これは、ストリックランド夫人特有のことではなく、女性が働くことは美德とされず金銭的に男性に頼らざるを得ないという家父長制における女性像が反映された描写であると考えられる。しかし、彼女は実際には男性がいなくても生きていける人物である。ストリックランドが家を出た後、生活費を稼がなければならなくなった夫人は、すぐに速記とタイプライターを習い始めた。そして、仕事をてきぱきとこなせる夫人は清書事業を成功させたという描写がある。つまり、「女性は男性がいないと生きていけない」と決めつけた価値観に基づく描写であったことが理解できるだろう。また、自分で生活費を稼ぐことを恥じる様子も描かれている。前述したように彼女は清書事業を成功させるが、そのことを恥じる様子が語り手によって語られている。

夫人自身は、自分で生活費を稼ぐことにいまだに忸怩たる思いがあるようだ。何かにつけ、生まれがレディーであることを言外に匂わせた。（中略）女だてらに事業に乗り出して恥ずかしい。仕事でこんなに有能であるのも恥ずかしい。でも、明晩はサウスケンジントンに住む勅撰弁護士と夕食を共にすることになっていて、とても楽しみにしている……。 （土屋訳, p. 117）

上記引用のように、事業の成功を誇らず、生まれの良さをアピールする様子から、女性にとって仕事の成功は誇れることではないことが伺える。また、彼女の娘もこの仕事を継ぐのかを聞かれた際には、「まさか！そんなことはさせません。あの子はとても美人です。きっといい縁談が持ち上がりますわ」（土屋訳, p. 118）と答えている。縁談を期待する様子から、女性にとっては仕事をするのではなく地位の高い男性と結婚することが幸せだという価値観を彼女が持っていることが推察できる。これは、結婚こそ女性の幸せという価値観が世間に流布していた時代であることも反映されているだろう。

また、世間体を非常に気にする性格であることも描かれている。ストリックランドが家を出て行った後、語り手が彼女の家を訪れた際に、彼女は「それで、みなさんはどう噂していらっしゃるのかしら」（土屋訳, p. 54）と語り手に尋ねている。そして語り手がローズ・ウォーターフォードから聞いたと答えると、「あの方がどう言われたか、正確に教えてください」（土屋訳, p. 55）と言い、詳しく知ろうとしている。また、ストリックランドについて彼女は、「戻ってほしい。（中略）今戻ってくれば、なんとでも取り繕えます。世間には全く知られずに済みます」（土屋訳, p. 68）と話している。このように、世間の噂を気にする様子や、世間体を保つために夫に戻って欲しいと願う様子から、彼女は世間体を気にする性格であることが推察できる。このようなストリックランド夫人に対して、語り手は「夫人が世間体を気にしているのを知って、少し熱が冷めた。わたしはまだ若く、女の生活において他人の意見がどれほど重要かわかっていなかった」（金原訳, p. 59）と述べており、やや批

判的な態度をとっていることがわかる。

また、彼女は世間体を気にするあまり、したたかさも持ち合わせた人物として描かれている。夫人が悲しむ様子に対して、語り手は以下のように述べている。

夫人の態度には矛盾するところがあり、それが気になった。苦しんでいるのは確かだが、同情を買うために、哀れな自分をことさら演出していたようにも思えた。初めから泣くつもりだったらしいのは、ハンカチをたくさん準備していたことからもはっきりしている。用意のよさには感心したが、あらためて考えてみると、そのせいで夫人の悲しみは色あせて見えた。夫を取りもどしたいのは愛しているからなのか、人の陰口が怖いからなのか。(金原訳, pp. 61-62)

上記場面での、彼女があらかじめハンカチを多量に用意し、泣いて語り手の同情を引こうとしていた様子はしたたかさの現れと言えるだろう。また、ストリックランドが絵を描くために家を出たと知りつつ、彼が女と逃げたという話を周りにして自身が同情してもらえるようにした以下の場面からも、彼女のしたたかさがわかる。

その後、事態が推移していく中で、ストリックランド夫人のしたたかさがしだいに明らかになってきた。(中略) ある日、夫人がこう言った。「あの……チャールズがパリで独りだとのことでしたけれど、あれは何かの間違いですわね、きっと。誰からとは明かせませんが、確かな筋から、イギリスを出たときは一人ではなかったと聞きましたから」(中略)「申し上げたいのは、主人の駆け落ちが話題になるようなことがあっても、どうか否定なさないでください、ということです」(中略) やがて、夫人の友人たちの間で、奇妙な話がささやかれはじめた。チャールズ・ストリックランドはエンパイア劇場にバレエを見にいき、出演していたフランス人バレリーナに一目惚れして、パリまで追いかけていった、というのだ。このロマンチックな噂の出所は不明だが、推して知るべしだろう。おかげでストリックランド夫人には同情が集まり、文壇周辺でのステータスが少なからず上がった。(金原訳, pp. 113-15)

この語り手の描写から、彼女は嘘の噂を流してまで世間体を気にし、自分が生きやすくなるようにするしたたかさを持ち合わせた人物であることがわかる。一方で、嘘の噂を流したことは、彼女が女性であるからこそ特に周りからの見え方を気にせざるを得ず、そのことから強いられる行動であるとも解釈できるだろう。彼女の行動からは、女性として生きる大変さが伺える。

そして、彼女がどのような肩書きの人の妻であるかを気にする様子も描かれている。「株の仲買人より画家の妻でいるほうがずっといいもの」(金原訳, p. 92) という彼女の言葉から、誰の妻であるかを気にしていることがわかる。また、ストリックランドが画家を志して

家を出たと知ったときには激怒し許さないと言っていたが、彼が天才画家となった後には、その妻としての自分の立場を喜ぶようになる様子も描かれている。「わたし、夫の話をするのは義務だと思っているの。天才画家の妻でいることには責任が伴うのよ」(金原訳, p. 366) という彼女の言葉からは、天才画家の妻でいられることを誇りに思っていることが感じられる。これは、物語の序盤で夫について「典型的な株式仲買人ですから、死ぬほど退屈なさるんじゃないかしら」(土屋訳, p. 36) と述べ、少し恥じているような様子とは対照的に見える。このように、誰の妻であるかを気にし、そこに自身のアイデンティティを見出す様子からは、その人自身としてではなく、「誰々の妻」と世間から認識される女性としての生き方の影響があることが推察できるだろう。

以上のことから、ストリックランド夫人は、一見すると理想的な主婦のようだが世間体を非常に気にしており、それに基づくしたたかさも併せ持った人物であることが理解できた。また、女性として男性に頼って生活せざるを得ないことや、自分で生活費を稼ぐことを恥じる価値観を持っていることも読み取ることができた。これに加え、この作品の中に存在する女性へのジェンダー観として、主婦としてのあり方を本能だと語り手が捉えていることも指摘しておきたい。ストリックランドに会いにパリへ行った後に、再び夫人の家を訪れた際の様子について語り手は、「客間はこのまえより整っていた。(中略) どうやら主婦としての本能が心の動揺に打ち勝ったようだ」(土屋訳, p. 104) と描写している。このように主婦としての女性の習性を本能として捉えていることから、女性は本能として家事ができるというジェンダースtereotypeが読み取れるだろう。

上記の分析を踏まえると、ストリックランド夫人に対してジェンダーに基づく抑圧があると言えるだろうか。彼女が世間体を気にすることについて、前述したように、語り手も彼女が女性であるからこそ周りの意見が重要であることに起因すると述べている。このことから、彼女が女性であるからこそ、周りからの見え方を気にして生きなければならず、時には嘘をついてまで自分の地位を保ち、本当の自分の姿では生きられないという意味で、彼女はジェンダー観によって抑圧されているといえよう。また、彼女が事業の成功を恥じて最終的には事業を辞めていることから、第 1 章で示したように、ストリックランド夫人は彼女が本来持っていた自立心と、家父長制社会に影響されて作られた価値観との間での苦悩があった人物であると解釈できる。そして、この苦悩は彼女が女性だったからこそ生まれたものであるため、ジェンダーに基づく抑圧があることの根拠となるといえよう。

本節では、ストリックランド夫人の描かれ方をジェンダーの視点から分析した結果、彼女は理想的な主婦だが世間体を非常に気にしており、それに基づくしたたかさも併せ持った人物として描かれていることを示すことができた。また、彼女が女性として男性に頼って生活せざるを得ないことや、自分で生活費を稼ぐことを恥じる価値観を持っていることも指摘した。そして、彼女は女性であるからこそ世間体を気にして偽りの自分であることを強いられるという、ジェンダーに基づく抑圧があることを明らかにした。

第2節 ブランチとアタの描かれ方

前節ではストリックランド夫人がどのように描かれているかを分析し、彼女は女性だからこそその生き方を強要されたと言えることを論じた。では、他の女性キャラクターはどのように描かれているのだろうか。本節では、ブランチとアタという2人の女性キャラクターを取り上げ、彼女たちがどのように描かれているかをジェンダーの観点から分析する。そして、彼女たちに対するジェンダーに基づく抑圧があるかどうかを検討する。

1) ブランチ

既述のように、ブランチはストループの妻である。ストリックランドが体調を崩した際にストループは彼を家に泊め、妻ブランチに看病をさせた。このことがきっかけでブランチはストリックランドのことを好きになり、夫ストループの元を離れるが、ストリックランドが愛してくれないことに絶望して自殺をしてしまうという人物である。彼女の描写について、本論では4点指摘したい。

1点目として、彼女が良い主婦として描かれている場面を見てみよう。語り手は以下の描写をしている。

二人の日常生活はきちんとしていて、いつ訪れても目に快く、居心地がよかった。アトリエと寝室と狭い台所があるだけの家だったから、夫人一人ですべての家事をこなしていた。夫が絵を描いている間に買い物に出かけ、昼食を作り、縫い物をして、一日中、働き蟻のように忙しく立ち働いた。夜にはアトリエの椅子に座り、横で夫が奏でる音楽を聴きながら、また縫い物をした（土屋訳, p. 160）

上記引用場面の描写から、彼女は常に家を整え、全ての家事を一人でこなす働き者の主婦であることが読み取れる。このような良い主婦としての描写には、ストリックランド夫人と同様、家父長制社会において理想とされた有能な主婦像が反映されていると思われる。

2点目として、彼女がストリックランドのことを好きになり、恋に盲目的になることについて、典型的な女性の在り方として描かれている。彼女が盲目であることは、「恋で盲目となり、現実であってほしいことを現実だと思い込んだ。自分のこの大きな愛が、相手にも同じだけの愛を目覚めさせないことなどあり得ない、と信じた」（土屋訳, p. 286）という語り手の描写や、ブランチ自身の「自分でもどうにもできないの」（土屋訳, p. 194）という言葉からわかる。そして、「たいていの男にとって、愛は日々の雑事のひとつでしかない」（金原訳, p. 266）という語り手の描写から、語り手は男性にとって恋愛はたいしたことではないと考えていることが伺える。また、「恋愛の比重が男性に比べて格段に高い女性」（土屋訳, p. 286）や「女は一日中愛してられるが、男はときどきしか愛せない」（金原訳, p. 267）という語り手の言葉からは、男性とは対照的に、女性にとって恋愛は重要なものであると語り手が考えていることがわかる。また、自殺したブランチについて、ブランチを診た

医者が、「愛ゆえの自殺か。女の得意技だな」（土屋訳, p. 228）と述べており、「女の得意技」と表現していることから、自殺するほど恋愛にのめり込むのは女性であるという描写がなされていると理解できよう。つまり、ストリックランドに夢中になるブランチは、男性とは対照的に恋愛を重要視して時には自殺まで図ってしまう典型的な女性として描かれており、これはジェンダーステレオタイプ的な描写と言えるだろう。

3点目として、彼女は夫を憎んでいる人物でもあることが描かれている。ストリックランドに恋をして家を出たブランチは、夫ストルーブに街で会っても毎回無視をした。また、ストルーブに平手打ちをする場面もある。これらのことについて語り手は、「残酷なほどの無関心ではないか、と私は思った。夫に拷問の痛みを与え、それを楽しんでいるのだろうか。なぜそれほどまでに夫を憎むのか、とても不思議に思えた」（土屋訳, p. 212）と述べており、ブランチには冷酷な面があり夫をなぜか憎んでいることがわかる。そして、彼女が夫を憎むのは、第2章第3節で述べたように、ストルーブがブランチを助けた過去があることに起因するとストリックランドは言う。ストリックランドは「（ブランチが）俺に身を任せたのはストルーブへの仕返しの意味がある。窮地にある自分を救ったことへの腹いせだ」（土屋訳, p. 284）と述べており、自らを救ってくれたことはやがて憎しみになるという。また、ストリックランドは、「女はな、男にいくら痛めつけられたって許せるんだ。だが、我が身を犠牲にして自分を救ってくれようなんて男は絶対に許さんぞ」（土屋訳, p. 262-63）と述べている。現代の感覚では、一般に女性は自分を救ってくれる優しい男性を魅力的に感じるように思われる。心理学者の高坂（2019）が273名に対して行った2017年の調査でも、女性が魅力を感じる男性の人柄として、72.8%が「優しい」という特徴を挙げている。そのため、女性は自分を救ってくれる男性を許さないというストリックランドの主張には疑念が残る。しかし、この作品においては、自らを傷つける男性は良いが自らを救うような男性を女性は許さないということが、女性に対するジェンダーステレオタイプとして語られているのである。つまり、ブランチは、夫に救われたために夫を憎む、この作品のジェンダー観に基づくと典型的な女性として描かれていることがわかるだろう。

4点目として、彼女は結婚に価値を見出している人物であり、結婚に価値を見出すのは女性の性質であると描かれている。ストリックランドに恋をしたブランチに対する語り手の描写を見てみよう。

（ブランチは）きっと、ストルーヴェを本当に愛したことなどなかったにちがいない。夫への愛にみえたのは、じつは与えてもらう愛情や快適さに対する反応に過ぎなかったのだろう。ほとんどの女が、それを愛だと思いこむ。（中略）愛に似た感情は、庇護されていることの満足感や、財産を管理していることの誇り、夫に欲される喜び、居場所があることの嬉しさによって生まれる。そんな感情を女が愛と呼ぶのは、精神を重んじるところから生まれる虚栄だ。（金原訳, p. 189）

上記引用から、ブランチは本当には夫を愛していなかったが、結婚自体に価値があると思っ
込んでいたこと、そしてそれはブランチだけでなく女性の特性であると語り手が考えてい
ることがわかる。これは、女性の幸せは結婚することだと考えられていた当時の社会背景を
反映した描写かつジェンダーステレオタイプの描写だと言えるだろう。

上記の 4 点の描写を踏まえると、ブランチに対してジェンダーに基づく抑圧はあったら
うか。ストリックランドに恋をして家を出ていくなど勝手な行動をしており、一見あまり
抑圧はないように見える。しかし、屋敷を追い出されたブランチの過去について考えると、
男女の間に子供ができた場合に、男性は無責任に振る舞うこともできるが、女性は身籠る性
別であるからこそ妊娠という事実から逃れられず、そのことによりブランチは追い詰めら
れ、ストループに救ってもらって運命になった。つまり、妊娠の苦悩に苛まれ、自殺するかス
トループと結婚するかという決断を迫られたのは、彼女が女性であったからこそその出来事
と言えるだろう。また、1 点目に指摘した、彼女が働き者である描写からは、ストループに
救ってもらい生活できているからこそ、常に完璧に家の状態を保つなど良い妻でなければ
いけないという無言のプレッシャーを彼女が感じていたことが推測できる。また、第 2 章
第 3 節で指摘したように、ストループは自分が妻を助けた恩を仄めかし、妻に理想的な妻
でいさせる無言の圧力をかけている。これらのことから、彼女は夫からの抑圧を受け、女性
であるからこそその生きづらさに直面していたとも言えるだろう。また、ブランチについて典
型的な女性だと述べられていることが多く、女性はこうだという偏見的な目に晒されてい
たこともわかる。したがって、ブランチに対してジェンダーに基づく抑圧があるといえよう。

2) アタ

アタは、ストリックランドがタヒチで結婚する 17 歳の女性である。タヒチの料理人であ
るティアレが 2 人の仲介人である。ティアレが料理を振る舞うホテルにやって来たストリ
ックランドのことをアタが見ていたため、ストリックランドのことが好きなのかをティア
レがアタに尋ねてみたところ、アタは「嫌いじゃない」(土屋訳, p. 339) と答えた。そのた
め、ティアレはストリックランドに身を固めることを提案し、2 人は 1 ヶ月の同棲を経て結
婚する運びとなった。アタの描写について、本論では 4 点指摘したい。

1 点目として、アタは寛容で多くを望まない女性として描かれている。アタのことをスト
リックランドにアピールする際、ティアレは「ほかの女の子みたいに浮気者でもないし。(中
略) 男はどこかに妻がいるもの。アタは分別のある子だから、市長さんの前で式を挙げよう
だなんて思ってないわ」(金原訳, pp. 314-15) と話している。アタ自身は浮気をしないが、
ストリックランドに妻がいることは容認する女性として描かれていることがわかる。そし
てそれがアピールポイントとして語られていることから、男性が結婚していても容認し、結
婚式を挙げることなどを期待しないという、寛容で多くを望まない女性が良い女性だとい
う価値観に基づいてこの作品が書かれていると言えるだろう。また、男性が既婚であること
は容認するが、自身は浮気をしないという点が美德として描かれていることから、男女が平

等な立場ではなく、女性が理不尽にさらされることをよしとする価値観が作品に存在していることも指摘できると思われる。

2点目として、アタはストリックランドにとって都合の良い奴隷のような女性として描かれている。ストリックランドは、アタとの暮らしはどうかと聞かれた際に「あの子はおれを放っておいてくれる。おれに食事を作り、子どもの世話をする。おれのいうこともきく。女に求めることをみんな与えてくれる」(金原訳, p. 328) と答えている。食事の用意や子供の世話を全てする上に見返りは求めず、ストリックランドは絵を描くことだけに専念できるという状況を作ってくれるアタが理想的な女性として描かれているのである。また、アタとの3年間について、語り手は、「それからの3年間、ストリックランドは生涯で最も幸せだったのではないだろうか」(金原訳, p. 320) と述べている。ストリックランドが彼自身にとって都合の良い女性を理想としているだけでなく、それが理想であることを語り手も肯定しているのである。また、常に冷徹なストリックランドが、「どこへいこうとついていく」(金原訳, p. 344) というアタの言葉に心を揺さぶられ、涙を流す場面がある。したがって、ブランチのように愛を要求せず、ひたすらに尽くすアタは、ストリックランドの心を揺さぶるほど理想的な女性であると言えるだろう。アタが理想的な女性であることは、井出(1988)も指摘しており、ストリックランドはアタに女性的魅力を感じ取り、理想的女性というものを彫刻していると論じている。さらに、ストリックランドはアタについて、「犬のように扱い、手が痛くなるまで殴っても、まだ愛しているという」(金原訳, p. 344) と言っている。このことから、ストリックランドは家事育児をアタに押し付けるのみならず、もはや人間以下としてぞんざいに扱い、暴力まで振るっていることがわかる。上記のように、男女平等とはかけ離れ、男性にとって都合の良い女性が理想とされている上に、女性を奴隷のように扱うことが男性にとって幸せな状況として容認されていることから、この作品は男性主義的な価値観に基づいて書かれていると言えるだろう。

3点目として、アタは金銭面でもストリックランドを支えていることを指摘したい。ティアレがアタのことをストリックランドに紹介する際、貯金が多くあり土地も持っているため、アタと結婚すればなんの不自由もなく暮らせると話している。実際の結婚生活でも、2人はアタが持っていた土地に住み、その土地に生える果物を売って生計を立てていた。つまり、アタがストリックランドを養っていたのである。第1章で述べたように、ロンドンの暮らしでは、ストリックランドは典型的な中産階級の男性として稼ぎ家族を養うことを期待されていた。そのことを踏まえると、アタはストリックランドを「家族を養う」という家父長制における男性としての重荷からは解放する存在であると同時に、家父長制下のように男性に従属してくれる、男性にとって都合の良い存在であると指摘できるだろう。ストリックランドがこの状況を理想的であるとし、語り手も「幸せな3年間」と表現していることから、この作品は男性主義的な価値観を肯定していると言えるだろう。

4点目として、アタは暴力的な男性を理想としているという描写がある。ストリックランドがアタに対して「アタ、おれと結婚したいのか? (中略) おれはおまえを殴るぞ」(金原

訳, p. 316) とアタに尋ねると、「殴られなかったら、愛されてることもわかりません」(金原訳, p. 316) と答えている。アタの発言から、アタは殴られることで愛情を感じるタイプであることがわかる。また、これはアタ特有のことではないと描かれていることがティアレの発言からわかる。ティアレが「最初の亭主のジョンソン船長は、年中あたしを殴ってた。あれこそ男ってものよ」(金原訳, p. 317) と暴力的な夫を「男らしい」と捉え称賛する発言をしている。そして、ジョンソン船長と死別した後に再婚した夫については、手も挙げない人で、うんざりして離婚したと話し、「がっかりさせられた」(金原訳, p. 317) と酷評している。アタだけでなくティアレも暴力的な男性を理想としていることから、この作品では暴力的な男性を理想とするのは女性にとって一般的なことだという描かれ方がされていると理解できる。これは家庭内暴力などが問題視されている現代の視点から見ると疑問を抱く描写である。しかし、奴隷のように扱われても尽くすアタが理想の女性として描かれていることを踏まえると、女性を奴隷のように扱いたいという男性の欲望を叶える女性が理想的だという価値観が反映された描写だと言えるかもしれない。

上記の 4 点を踏まえると、アタに対して、ジェンダーに基づく抑圧があると言えるだろうか。アタには、結婚生活を維持するためには夫ストリックランドの理想の女性であり続けなければいけないというプレッシャーがあったことが推測できる。また、3 点目で指摘したように「家族を養う」という家父長制における男性としての重荷からは解放すると同時に、家父長制下のように男性に従属するアタは、男性にとっての理想の女性像を体現する存在として、全てのことを 1 人でこなさなければならないという抑圧を受けていたと思われる。したがって、アタについてもジェンダーに基づく抑圧があると言えるだろう。

本節では、ブランチとアタがどのように描かれているかを分析した。ブランチについては、良い主婦として描かれているが、夫ストルーブから母親のような役割を期待されていたことが読み取れることや、ストルーブを憎んでいる人物であることを指摘した。アタについては、奴隷のように扱われても尽くし続けるという、男性にとって都合の良い存在として描かれていることを指摘した。そして、彼女たちは 2 人共、ジェンダーに基づく抑圧を受けていたことを明らかにした。

第 3 節 女性キャラクターと男性キャラクターの比較

前章ではストリックランドとストルーブという男性キャラクターがどのように描かれているかを分析し、本章の前節まででは、ストリックランド夫人、ブランチ、アタという女性キャラクターがどのように描かれているかを分析した。本節では、前章と本章での分析を踏まえ、『月と六ペンス』における男性と女性の描かれ方を比較し、この作品におけるジェンダー観及び、フェミニズム批評の視点から見た問題点について論じる。

まず、男性キャラクターの共通点について指摘したい。冷酷なストリックランドと、道化者で妻を溺愛するストルーブは全く違う人物のように見えるが、3 つの共通点が挙げられる。まず、2 人とも家族を養う人物である。前述したように、「ストリックランド一家は、ブル

ジョウ階級の平均的な家庭だった」(金原訳, p. 39) や、「ストループにはかなりの収入があった」(土屋訳, p. 121) という言葉から、2人は中産階級の男性へのステレオタイプのイメージとして描かれていると言えるだろう。そしてこれは、第2章第1節で確認した、家族を養う男性という19世紀における中産階級の男性のステレオタイプのイメージに影響された描写であることが推測できる。

2つ目の共通点として、将来の夢を話した際に親から否定された過去があることが挙げられる。ストリックランドは画家になりたかったが、「父親は普通の仕事に就かせたがった。芸術じゃ食っていけないと言ってな」(金原訳, p. 77) と父親に否定されたことを話している。ストループも画家を志したが、「父は僕が同じ大工になることを望んでいた」(土屋訳, p.239) と述べている。第2章第1節で示したように、19世紀では女性が働くことは美德とみなされなかったことを踏まえると、将来の職業について話すこと自体が男性特有のことである。そして、ストリックランドは芸術家の金銭的な不安定さを心配されていることから、男性は稼げる職業に就くべきだというジェンダー観が存在していることがわかる。また、ストループは家業を継ぐことを期待されていることから、男性は家業を継ぐべきだというジェンダー観も存在していると言えるだろう。このように将来の職業について親から意見されることは、家族を養うことや家業を継ぐことが期待される男性ならではの出来事であると考えられる。

3つ目の共通点として、女性に対して自分の理想の役割を押し付けている面があることが挙げられる。ストリックランドは、自分に対する要求が多かったブランチのことを捨て、アタについては、自分のことを放っておいてくれる上に、飯を作り、子供の世話をし、言うことをやってくれるからアタといて幸せだと話している。自分の理想ではない女性の元は去り、自分にとって都合の良い世話をしてくれる女性のことを理想的だと話していることから、妻に対して自分の理想を押し付けていると言えるだろう。ストループは、前述したように、病気のストリックランドを家で看病することに妻が反対した際、自分が妻を助けた過去を仄めかして妻が看病に賛成するように仕向けている。このことに加え、ストループの妻が、結婚してから何かをお願いしたことはないと話していることから、ストループは妻に対して無言の圧力をかけている面があると言えるだろう。このように、ストリックランドとストループは女性に対して自分の理想の役割を押し付けている面がある人物だといえよう。

では、女性キャラクターにはどのような共通点があるだろうか。ストリックランド夫人、ブランチ、アタの3人は、それぞれ形は違うが、抑圧されていることが共通点として挙げられる。ストリックランド夫人は、女性であるからこそ周りからの評判を気にしなければならず、夫は女性と駆け落ちしたと周囲に嘘をつくなど、ありのままではいられないという意味で彼女は抑圧されていると言えるだろう。ブランチは、一見夫から溺愛されているように見えるが、かつて夫に救ってもらった恩による無言の圧力があり、理想的な妻であることを強いられたという意味で抑圧されていると解釈できる。アタは結婚を維持するため、ストリックランドの理想と合致するように、子供の世話や家事などを全てこなし奴隷のような扱い

に耐えることを求められたことから抑圧されていると言えるであろう。このように、ストリックランド夫人、ブランチ、アタの 3 人は女性であるからこそその抑圧を受けていると考えられるのである。男性にとって都合の良い女性が「素晴らしい女性」として描かれていることから、この作品は男性中心主義的な価値観に基づいて書かれた小説であると指摘できるだろう。

次に、男性キャラクターと女性キャラクターの描かれ方を比較したい。まず、前述したように男性はお金を稼いで家族を養うこと、女性は家事をこなして男性を支えることが求められていることから、19 世紀に浸透していた性別役割分担意識に基づく描写がされていることがわかる。つまり、男女は領分を別にするべきというジェンダー観があるといえよう。

また、男性と比較すると、女性キャラクターの内心はあまり語られていないことが相違点として挙げられる。男性キャラクターは語り手と直接会話することが多く、また語り手によって心情が推察されている。一方、女性キャラクターは語り手と直接会話することが少なく、アタに至っては、語り手と直接会話することが一度もない。このため、彼女達の心情は男性と比較して理解しづらいのである。内心が語られない例として、ストループがブランチに「僕が気にさわることをしたのなら、いってくればよかった。きっと直したはずだ」（金原訳, p. 179）と言ったことに対し、ブランチは答えず表情のない顔でいるという場面がある。既述したようにブランチはストループに何かを頼んだことは一度もないと話す場面があることに加え、唯一頼んだ、ストリックランドを家で看病しないという願いについて、ストループから過去の恩を仄めかされ却下されている。これらを踏まえると、ブランチが嫌なことを主張してもストループはそれを受け入れておらず、上記の「直したはずだ」というストループの発言は事実ではなく、ブランチは不満を感じて無言になっていると解釈できよう。このように、女性の不満が語られていない可能性があると言及できるのである。

そして、ストリックランドとストリックランド夫人の描写を比較すると、二人の描写は対照的であるが、ストリックランドが肯定的に描かれている。ストリックランドは、冒頭ではつまらない人間として描かれているが、世間体を気にせず夢を追い、最終的には傑作を完成させる天才画家として描かれ、語り手によって「偉大な男」（土屋訳, p. 289）と高く評価されている。一方ストリックランド夫人は、初めは有能な主婦として描かれるものの、世間体を気にし、したたかに生きる様子が強調して描かれるようになる。このように二人の描かれ方は対照的であるが、ストリックランド夫人が世間体を気にして生きざるを得なかったことは女性であるからこそその苦悩であることが看過され、女性達を苦しめたストリックランドの冷酷さについては「たぐいまれな個性の持ち主であれば、どんな欠点にも喜んで目をつぶる」（金原訳, p. 6）と語り手によって容認されているのである。このように語り手によってストリックランドが高く評価されていることから、この作品はジェンダー不平等を容認し、男性主義的な価値観を肯定しているといえよう。

本節では、男性と女性の描かれ方を比較し、この作品には男女は領分を別にするべきというジェンダー観があり、男性は金銭を稼ぐことが期待され、女性は家事をこなして男性を支

えることが期待されていると指摘した。また、男性の共通点として、女性に対して自分の理想の役割を押し付けている面があることを明らかにした。また女性の共通点として、女性であるからこそその抑圧を受けていることを指摘した。そして、男性と比較すると、女性キャラクターの内心はあまり語られておらず、女性の不満が表面化していない可能性があることや、この作品がジェンダー不平等を容認し、男性主義的な価値観を肯定していることを論じた。これを踏まえると、第1章で確認した『月と六ペンス』に対する主流な解釈は、作品における女性の抑圧という問題を見過ごしており、男性中心主義的な面を肯定してしまっていると批判できるだろう。

第4節 女性に対するモームの価値観

前節までで論じたように、『月と六ペンス』における女性キャラクターは男性主義的な価値観に基づいて描かれている。そのような描写の理由として、作品が書かれた19世紀における家父長制の価値観が反映されていることは既に指摘したが、作者モームの価値観は女性描写に影響しているのだろうか。本節ではモームの価値観を参照し、女性キャラクターの描写と関係があると言えるかを検討する。

モームは、自身の人生を振り返ったエッセイである『サミング・アップ』(2007)の中で、「私の人生で起こったことは全て、これまで書いた書物の中で様々な形で利用してきた。(中略)事実と虚構が作品の中で混じり合っているため、今振り返ってみると、両者を区別することはもうほとんど無理になっている」(p.7)と述べている。つまり、モームが経験したことや彼の価値観は作品に反映されているのである。『サミング・アップ』から、モームの女性観に影響を与えたと思われる事柄として、以下の2点を指摘したい。

まず、モームは幸せではない結婚生活を送った。モームは、有名な慈善家の娘であるシリーという女性と1917年に結婚するが、1927年に離婚している。行方(2010)によれば、2人は最初から愛のない不幸な関係で、1919年に出版された『月と六ペンス』の執筆中にも激しい夫婦喧嘩が続いていたという。モームは頭の良いシリーにしばしば言い負かされており、それに対する仕返しとして、自分では言えない悪口をストリックランドに代弁させたと、この研究者は指摘している。また、英文学者の山内(1969)も、この作品を書く直前にモームが不幸な結婚をしたことにより、モームの女性に対する態度が皮肉になったことを指摘している。このように、モームは自身の結婚生活が幸せではなかったために女性嫌悪の気持ちを募らせ、それが作品の女性描写に反映された可能性があると言えるのである。また以上を踏まえると、ストリックランドが家族を捨てて芸術に没頭したことは、妻と離婚をし芸術に没頭するというモームの理想が反映された描写と言えるかもしれない。

また、モームは母を理想化している。彼は8歳の時に結核で母を亡くすが、母の死は癒えない傷だった。モームが母を思慕していたことは、彼が晩年までベットのそばに母の写真を置き続けた(田中,2004)ことや、『サミング・アップ』の中で、幼い頃、不幸な出来事は全て夢で、目覚めたら再び母と一緒に家にいるはずだという夢を毎晩見ていたとモームが語

っていることから理解できよう。また、『サミング・アップ』において、幼少期に背が低く、また吃音であったために学校でいじめられ、内向的で繊細な性格であったことをモームは述べている。このように彼は孤独であったことから、母親のように誰かが自分を気遣ってくれることを切望し、母親のような優しくて温かい女性を理想としていたことを Wang & Pancheng(2021)は指摘している。同様に Muraoka(1991)も、モームは母を理想化しており、母のイメージを引きずって生きてきた過程で理想の女性像を確立したことを指摘している。このように、モームは母を忘れられず、自分に無償の愛をくれる母のような女性を理想としているのである。これを踏まえると、『月と六ペンス』において純粹無垢でストリックランドに無償の愛を注ぐアタが理想的な女性として描かれていることは、モームの理想の女性像が反映された結果であるともいえよう。また、モームの父は 40 歳の時に 20 歳の女性と結婚しているが、『月と六ペンス』において 47 歳のストリックランドが最終的に 17 歳のアタと結婚したことは、モームが母と父の結婚を理想としたことによる描写であると解釈できるかもしれない。

本節では、モームの価値観を参照し、女性キャラクターの描写と関係があると言えるか検討した。前述した 2 点を踏まえると、モームが不幸な結婚によって女性への嫌悪を募らせていたことが、『月と六ペンス』における女性蔑視と解釈できる描写へと影響し、モームが母のように無償の愛を注いでくれる女性を理想としていたことが、作中でアタが理想の女性として描かれることに影響していた可能性があるといえよう。したがって、19 世紀における価値観のみならず、モームの個人的な価値観が作品に影響した可能性があると思われる。一方で、19 世紀における価値観とモームの個人的な価値観は切り分けられるものではなく、女性蔑視といったモームの価値観は、女性の立場が低かった 19 世紀の価値観に影響されて形成された可能性も当然あると思われることには留意したい。

本章では、ストリックランド夫人、ブランチ、アタという 3 人の女性キャラクターについて分析し、彼女たちに対するジェンダーに基づく抑圧があると言えることを明らかにした。根拠として、ストリックランド夫人は世間体を守るために偽りの自分であることを強いられている点、ブランチは夫ストループに助けてもらった過去があることから良い妻でいなければならないという無言のプレッシャーを感じていたと推察できる点、アタは男性にとっての理想の女性像を体現する存在として家事・育児・生活費の獲得を 1 人でこなすことを強いられている点から、抑圧があると考察した。また、男性と女性の描かれ方を比較し、男性が女性に対して自分の理想の役割を押し付けている面があることに加え、この作品をフェミニズム批評の視点から解釈すると、女性に対する抑圧、そして男性主義的な価値観の肯定という問題が明らかになることを論じた。そして、モームの価値観を参照し、モームが不幸な結婚生活を送ったことや母を思慕していたことが、作品の女性描写に影響を与えたと考えられることを示した。

終章

ウィリアム・サマセット・モームの『月と六ペンス』(1919)は、これまで多様な解釈がなされてきた。その中でも、主に3つの観点からの研究が多く見られる。1つ目は、主人公ストリックランドの人物像に着目し、それを明らかにすることを目的とした研究である。2つ目は、語り手など作品の構造に着目した研究である。3つ目は、モームが描こうとしたテーマの考察や、モームの価値観が作品にどのように現れているかなど、作者に着目した研究である。しかし、作品に登場する女性キャラクターに着目した研究は少なく、フェミニズム批評の観点からこの作品が十分に検討されているとは言い難い。そこで本研究では、作中の女性キャラクターの描写に着目し、フェミニズム批評の視座から作品を再評価することを主題とした。そして、作品が描かれた20世紀初頭とはジェンダー観が異なる現代の視点からテキストを詳細に分析することで、この作品がジェンダーに関するどのような価値観を肯定もしくは否定しているかを分析することを目的とした。方法としては、作中のジェンダー観が読み取れる箇所について、フェミニズム批評の手法を用いてテキストの分析を行い、男性キャラクターと女性キャラクターの描かれ方を比較することで、この作品がどのような価値観に基づいて書かれているかを考察した。

第1章では、まず、『月と六ペンス』についてのフェミニズム批評以外の視点からの先行研究を整理し、作品に対する主流な解釈を確認した。そして、フェミニズム批評の視点からの先行研究を確認し、家父長制社会における男性主義的な価値観に基づいて女性キャラクターの言動が抑圧されていることや、奴隷のように男性に仕える女性像が描かれていることが既に指摘されていることを示した。一方で、テキストを引用せずに主張された解釈があることに加え、先行研究では女性キャラクターのみにしか着目されていないという問題点を指摘し、女性キャラクターの描写と男性キャラクターの描写を比較するという、本作品における更なる研究の余地があることについて論じた。そして、本論文で用いるフェミニズム批評について、テキストを女性の視点から批評することで、テキスト内における男女不平等を明らかにしようとする営みであることを確認した。

第2章では、まず、作品の舞台となる19世紀におけるイギリスのジェンダー観についてまとめ、作品が書かれた際に前提として存在していた価値観がどのようなものであったかを確認した。その上で、主人公であるストリックランドとその友人のストループという2人の男性キャラクターを取り上げ、彼らの描かれ方を分析した。そして、ストリックランドが非常に冷酷で女性を馬鹿にした価値観を持つ人物として描かれていることを指摘した。そして、この作品のジェンダー観として、男性には知性やお金を稼ぐことが期待されるという価値観が存在していることを明らかにした。ストループについては、非常に優しく妻ブランチを溺愛しているが、一方でブランチに優しい妻としての役割を押し付けていることや、妻に母と同じ役割を期待している人物でもあると解釈できることを指摘した。また、男性はヒステリーを起こさず落ち着いているべきだというジェンダー観がこの作品に存在していることを明らかにした。

第3章では、まず、ストリックランド夫人、ブランチ、アタという3人の女性キャラクターを取り上げ、彼女たちの描かれ方をジェンダーの観点から分析した。そして、第2章の内容を踏まえ、男性キャラクターと女性キャラクターの描かれ方を比較し、作品からどのようなジェンダー観が読み取れるかについて論じた。ストリックランド夫人は、理想的な主婦だが世間体を非常に気にしており、それに基づくたかさも併せ持った人物として描かれていることを指摘した。そして、彼女は女性であるからこそ世間体を気にして偽りの自分であることを強いられるという、ジェンダーに基づく抑圧があることを明らかにした。また、ブランチは、ストループに助けてもらった過去があるからこそ、良い妻でいなければいけないという無言のプレッシャーを感じていた可能性があることを示した。アタについては、奴隷のように扱われても尽くし続けるという、男性にとって都合の良い存在として描かれていることを指摘した。また、男性キャラクターの共通点として、女性に対して自分の理想の役割を押し付けている面があることを指摘した。女性キャラクターの共通点として、形は違うが女性であるからこそその抑圧を受けていることを明らかにした。そして、男性と比較すると、女性キャラクターの内心はあまり語られておらず、女性の不満が表面化していない可能性があることや、この作品がジェンダー不平等を容認し、男性主義的な価値観を肯定していることを論じた。最後に、モームの女性に対する価値観を参照し、モームが不幸な結婚生活を送ったことや母を思慕していたことが、作品の女性描写に影響を与えたと考えられることを示した。

本稿では、『月と六ペンス』をフェミニズム批評の視点から分析した。その結論として、男性キャラクターは女性に対して自分の理想の役割を押し付けている面があるという共通点があること、そして女性キャラクターは女性であるからこそその抑圧を受けているという共通点を指摘できることから、この作品は男性中心的な価値観に基づいて描かれており、このことについて先行研究では見過ごされてきたという問題を指摘した。先行研究では行われていなかった、男性キャラクターと女性キャラクターの描写の比較を行ったことに加え、この作品が男性主義的な価値観を肯定しているという解釈を示したことに本稿の意義がある。また、先行研究では指摘されていない、ストループの女性に対する抑圧を指摘したことも本稿の意義といえよう。

参考文献

- Gaździńska, Anna. "A WOMAN IMPRISONED. ANALYSIS OF FORMAL INFERIORITY OF WOMEN IN SELECTED NOVELS OF W.S.MAUGHAM." *Folia Litteraria Anglia*, Vol. 5, University of Lodz Repository, 2002, pp. 71-85.
- Han, Yanli, and Malini, N. G. Ganapathy. "Mrs. Strickland's Personality in William Somerset's *The Moon and Sixpence*—from the Perspective of Feminist Criticism" *English Language and Literature Studies*, Vol. 13, No. 3, Canadian Center of Science and Education, 2023, pp. 49-58.
- Muraoka, Masayo. "Women in the Novels of W.S. Maugham -Mainly as Seen in *The Moon and Sixpence*" *Eibeibunka*, Vol. 21, Studies on English Language, Literature and Culture, 1991, pp. 37-56.
- Nakai, Makiko. "The Faculty for Myth: The Narrative Strategy of *The Moon and Sixpence*." *Osaka Literary Review*, Vol. 42, Osaka University Graduate School of Letters, English Literature and Linguistics, 2003, pp. 77-92.
- Showalter, Elaine. "Feminist Criticism in the Wilderness" *Critical inquiry*, Vol. 8, No. 2, The University of Chicago Press Journals, 1981, pp. 179-205.
- Wang, Dengwen, and Pancheng, Liu. "Character Analysis on the Three Ladies in *The Moon and Sixpence*." *Lecture Notes on Language and Literature*, Vol. 4, No. 1, 2021, pp. 57-62.
- 青木健「家庭の天使像とニュー・ウーマンの狭間で—ヴィクトリア朝の女子教育論」 *Seijo English monographs*, 36 巻, 成城大学, 2003, pp. 371-411.
- 井出良三『モーム文学の魅力』大阪教育図書, 1988.
- 大嶽秀夫『フェミニストたちの政治史：参政権、リブ、平等法』東京大学出版会, 2017.
- 大野直美『『月と六ペンス』について：芸術に憧れた男たち』『英米文化』26 巻, 英米文化学会, 1996, pp. 53-64.
- 織田元子『フェミニズム批評 理論化をめざして』勁草書房, 1988.
- カラー・ジョナサン『新版ディスコントラクション I』富山太佳夫, 折島庄司訳, 岩波現代文庫, 2009.
- 久木元信一郎「W.S. モーム『月と六ペンス』における語り手「わたし」の効果について」『東洋大学大学院紀要』53 巻, 2016, pp. 179-190.
- 小林富久子「フェミニスト文学批評について—アメリカの場合を中心に—」『早稲田商学』320 号, 早稲田商学同攻会, 1987, pp. 633-655.
- 櫻井清華『『源氏物語』宇治十帖の親子関係と性—フェミニズム批評の視座から—』『龍谷大学大学院文学研究科紀要』, 2013, pp. 1-254.
- 高岡尚子「ジョルジュ・サンド『アンドレ』を読む：フェミニズム批評・ジェンダー批評から」『奈良女性大学文学部研究教育年報』第 4 号, 2007, pp. 23-33.

- 高坂康雅「魅力を感じる異性像の分析」『和光大学現代人間学部紀要』第 12 号, 2019, pp. 47-60.
- 田中正志「Karl G. Pfeiffer によるサマセット・モーム考察」『第一経大論集』33 卷 4 号, 第一経済大学, 2004, pp. 47-59.
- 富田成子「『サイラス・マーナー』再考: 家庭の天使と新しい女」『甲子園短期大学紀要』28 卷, 2010, pp. 83-92.
- 行方明夫『サマセット・モームを読む』岩波書店, 2010.
- ミレット・ケイト『性の政治学』藤枝滯子訳, 自由国民社, 1973.
- モーム・サマセット・ウィリアム『月と六ペンス』金原瑞人訳, 新潮社, 2014.
- モーム・サマセット・ウィリアム『月と六ペンス』土屋政雄訳, 光文社, 2008.
- モーム・サマセット・ウィリアム『サミング・アップ』行方昭夫訳, 岩波書店, 2007.
- 山内良樹「The Moon and Sixpence の問題性について」『英文学研究』45 卷 2 号, 日本英文学会, 1969, pp. 324-325.
- 吉田尚子「イギリスの女性運動: 慈悲運動・女性参政権運動・女子労働・女子教育」『城西評論』1 卷, 城西大学女子短期大学部現代文化学科, 2003, pp.1-25.
- 脇田勇「The Moon and Sixpence 覚書」『小樽商科大学人文研究』56 卷, 1982, pp. 12-28.